

# UNI-LCJ / モンゴル加盟協 (UNI-LCM) 青年・女性セミナー

(2013年7月22～27日、モンゴル・ウランバートル)

## 報 告

### 目 次

1. 日本人講師 .....	2
2. プログラム .....	2
3. 報告 .....	3
4. 感想 .....	11



## 1. 日本人講師

	組織名	役職	氏名
団長	JP 労組	中央執行委員（労働条件担当部長）	新井 康寛
メンバー	情報労連	NTT 関連サービス労協・D&Y 労組	世古 静佳
メンバー	UA ゼンセン	政策・労働条件局 副部長	瀬戸 哲朗
メンバー	自動車総連	政策局 部長	川下 真由美
事務局	UNI-LCJapan	事務局次長	小川 陽子
			以上 5 名
（組織正式名称の 50 音順）			

## 2. プログラム

	7/22（月）	7/23（火）	7/24（水）	7/25（木）	7/26（金）	7/27（土）
午前		セミナー 開会式 自己紹介  「UNI-LCJ に ついて、日本 について知ろ う」	「青年の組織 化」 意見交換  「グループワ ーク」	郊外へ移動	ウランバートルへ移動  市内視察 職場視察・組 合事務所訪問 等	08:05 ウラ ンバートル 発 OM501
午後	14:40 成田発 OM502  18:50 ウランバ ートル着	「女性の組合 活動への参 画」 意見交換	「グループワ ーク」発表 まとめ 閉会式	モンゴル遊牧 民の生活体験	同上	13:40 成田 着
夜	「モンゴルを知 ろう」 夕食	両国参加者 懇親夕食会	文化ショー見 学 夕食	夕食	総括夕食会	
宿泊	ウランバートル市内ホテル	ウランバートル市内ホテル	ウランバートル市内ホテル	ゲルに宿泊	ウランバートル市内ホテル	

### 3. 報告

2013年7月22～27日、モンゴル・ウランバートルで、UNI-LCJ / モンゴル加盟協(UNI-LCM) 青年・女性セミナーが開催され、日本から、新井 JP 労組中執(労働条件担当部長)を団長に5名から構成される代表団が出席した。モンゴル側は、UNI 商業、郵便、ICTS 部会に加盟する7組織から30名が参加して、2日間、各国報告と意見交換を行った。その他、遊牧民の生活体験としてゲルに泊まったり、UNI-LCM 役員と交流したり、市内・職場等視察を行った。以下は、メンバーで分担した報告である。

報告：情報労連 世古 静佳

セミナーは、UNI-LCM オユンバヤール議長、そしてUNI-LCJ 代表団 新井団長の挨拶から始まった。モンゴル側の参加者は約30名で、9割以上が女性の参加者であった。

#### 開会式

##### オユンバヤール議長挨拶

UNI-LCM 青年・女性セミナーに参加するため、モンゴルまで来ていただいたことに感謝する。有意義なセミナーとなるよう積極的に意見交換を行いたい。

##### 新井団長挨拶



2000年よりセミナーが開始され、モンゴルの労働運動の民主化に少しでもUNI-LCJが貢献できたのではと思っている。

モンゴルは、近代的なビルの立つ地域と郊外のゲル地域とに二層化しており、よりディーセントな国にするため考えていくのがモンゴル側参加者の使命であると思う。今回のセミナーを通じて、若い参加者が組合運動に携わられることを願っている。

#### 「UNI-LCJ について知ろう」

新井団長より、2000年のUNI統合に伴うUNI-LCJ結成から今日までの沿革について説明を行ない、組織再編を経ながらもモンゴルでのセミナーが継続されていることに意義を感じていると述べた。そして、UNI-LCJ10年の成果として、2010年に第3回UNI世界大会開催を長崎で受け入れ、加盟組織の結束と協力により成功裏に開催されたことを報告した。

#### 「日本について知ろう」

##### 日本の経済・政治

自動車総連 川下政策局部長より報告を行なった。ナラン通訳とも関係の深い「日・モンゴル低炭素発展パートナーシップ」についての説明がされたこと。並びに、出発日前日に行なわれた参議院選挙の速報結果が報告されたことが特徴的であった。

モンゴル側から新政権についての質問があり、日本側より、新政権関連の記事では社会保障制度の後退が危惧されており、新政権が税金をどのように使っていくのか注視が必要と考えていること。あわせて、年金支給年齢が65歳に引き上げられることを受け、希望者が65歳まで働くことができる職場環境を作っていかなければならない、との回答がされた。



## 日本の社会・文化

UA ゼンセン 瀬戸政策・労働条件局副部長より報告を行なった。社会面では、日本の人口が少子高齢化傾向にあり、人口減少局面にあること。その人口も都市部に集中し、都市と地方で経済的格差が生じていることについて報告がされた。また、文化面では様々な具体例を挙げながら「クール・ジャパン」現象についての説明を行なった。



モンゴル側からは、先進国では地方と都市に経済的な格差がないというイメージを持っていたが、都市部に仕事があり、人口が集中している状況はモンゴルと同じであるという意見が出された。また、失われる地方の雇用に対して、労働組合は何かできるかとの質問が出され、日本側より、地方にあった工場が海外へと流出している背景には円高・資源高といった問題がある。一組合では直接解決できない課題であるため、労働組合は国に対し課題への対策要請を行う役割を果たしているとの回答が示された。

なお、瀬戸副部長の浴衣姿はモンゴル側参加者に大変好評であり、きちんと浴衣を日本から準備されてきたことに、“おもてなし”精神を感じた。

報告：JP 労組 新井 康寛

## 「女性の組合活動への参加」

### 日本からの報告

【報告者】UA ゼンセン 政策・労働条件局副部長 瀬戸哲朗

【題名】「男女共同参画推進の取り組み」

【概要】

## UA ゼンセンとは

- UI ゼンセンと日本サービス・流通連合で 2012 年 11 月 6 日結成
- 約 141 万人で日本最大の産業別労働組合
- 正社員以外が 50.1%、女性の割合が 57.8%

### なぜ男女共同参画に取り組むのか

- 少子高齢化(低い出生率、人口減少)
- 国際水準への対応(低い女性の社会参画、女性の M 字型カーブの働き方、大きい男女の賃金格差、著しく短い日本男性の家事・育児時間)

### UA ゼンセンにおける男女共同参画推進

- 女性組合員が過半数を占める組織の社会的責任
- あらゆる運動の中で男女共同参画の視点
- 労働組合活動への男女共同参画をさらに進める

## モンゴルからの報告

【報告者】モンゴル統一労組 執行委員長 アルタントヤ

【題名】男女共同参画社会に向けて

【概要】

### 労働市場における男女共同参画の課題

- 労働法制の環境について
  - 1950 年代からジェンダーの用語が使用される
  - 2011 年 2 月ジェンダー法施行(女性国会議員が増えたことにもなう改善)
  - しかし、賃金や職業に男女間の差があるとともに、正社員から非正規社員、専業主婦化などの変化もみられる

### 労働法令政策における男女共同参画

- 女性役員率(労組の委員長は 60%、産別の委員長は 46%、役員約 4 割が女性)
- ジェンダーの感覚を高める
- 女性の就労を高める
- 男女差別禁止法の制定
- 高収入職場への女性の就労促進

### 労働における男女共同参画を定める法令、政策の実

### 施状況

- ジェンダーに対する課題(早期退職、介護・子育て、保育園の不足、母子家庭の増加など)
- 労働差別の課題(出産後同じ職場に帰れない、退職にあたって女性差別)



## 意見交換

Q: 日本での女性役員状況等について知りたい

A: UA ゼンセン内の状況として

スーパーの女性委員長がいる。組合として、「組合活動で得られるもの、魅力を伝えたい。孤立



しないように複数の女性の登用に心掛ける」などについて気遣っている。

百貨店の女性書記長は、「家庭生活に不安を抱え、家族と相談して引き受けた」と言っていた。組合として、「女性の視点から、福利厚生、休憩室、トイレなどを使いやすくしている。複数の女性の参加など、発言しやすいシチュエーションづくり。会議開催時間の工夫や、スケジュールを早めに立てるなど組合活動と家庭生活の両立ができるように工夫している」などについて気遣っている。

Q：モンゴルは女性の委員長が多いが、うまくやっている秘訣は？

A：男性は、金融、外資系、鉱山、建築など高収入の仕事についている割合が高い。一方女性は、テレコムや商業、サービス業の女性の割合が高い。サービスでは9割が女性。そうした業種でも、指導者は男性なので女性の方が交渉しやすい。女性は母のセンス、細かいところに目が届く。国会議員も立候補者の3割以上が女性と決められていて、実際に7.6%が議員となっている。

Q：男性はリーダーに、女性はアシスタントになりなさいという教育がされているためではないか？

A：モンゴルの大学は女学生の方が多い。女性の方が高学歴。男性は15歳で軍隊に入る。教育上の差別はない。

報告：自動車総連 川下 真由美

## 「青年の組織化」

司会：ビャンバー・ゴビ労組委員長

モンゴル通信労組の青年を代表して、トゥグルトゥールさんよりプレゼン

モンゴル郵便労組の青年を代表して、ムンフバトさんよりプレゼン

- 郵便サービスはチンギスハン時代からあり、オコダイハンによって確立された。
- 1921年から近代的な郵便サービスがスタート。1994年まで郵便とテレコムは同じ会社だったが、独立し、現在はモンゴル郵便公社。万国郵便連合（UPU）加盟。
- モンゴル全国を郵便ネットワークで結ぶ。全県設置。ウランバートル市内24店舗、22のサービス、EMSは35カ国と提携。
- 若い組合員の教育に力を入れることを目標としている。レク活動を中心に、若い労働者に組合活動に参加してもらいながら、組合活動の意義も教えている。





情報労連 世古 静佳さん

- 東日本大震災後のボランティア活動について。情報労連は連合ボランティアに参画。情報労連統一ボランティアを宮城県南三陸に派遣、家屋内の土砂の除去を手伝った。
- 1年経過しても多くの方がボランティアに行った。(ボランティア平均年齢 41 歳。NTT 従業員の平均年齢は 50 歳)日本の青年は社会貢献に関心あり。ボランティアは若手を組合活動に引きつけるきっかけとなった。
- もう一つは募金。三陸やまだ漁協の復興・再生支援 一口 5000 円を出資金を募る。4 ヶ月間で 1 億 5 千万円出資金が集まった。一口 5000 円は若い世代でも払える金額のため、

多くの若手が参加した。

- その他の組合の社会貢献活動として、毎年 4 地域で平和行動。
- D&Y 労組の青年活動：ボーリング大会等。

JP 労組 新井 康寛さん

- 組合員数 24 万人。単一労組としては日本最大。
- JP 労組ユースネットワークは 30 歳まで。
- 主な活動は、書き損じハガキ、リサイクル・ブック・エイド、東日本大震災復興支援活動等。

質疑応答

Q：モンゴルの組合における青年の関わりについて、どのように感じるか。またどのような組織が有効だと思うか。

A：若手が多くて羨ましい。活動内容については日本と変わらない。

Q：(世古さんへ)モンゴルの貧困対策支援とはどのような活動か？

A：マンホールチルドレンを支援する NPO (ユイマール)。モンゴルの施設で芸を教え、習得した児童を日本に招待してコンサート等興行を行ってその収益を持ち帰る。

(モンゴル側) 私たちも支援したい。ユイマールと連絡をとってみたい。かつて UNI セミナーでも募金をしてガン病院に寄付した。様々な社会貢献の方法がある。

Q：どのように青年を組合に惹きつけることができるか。

A：社会貢献活動などの人気が高い。

Q：(新井さんへ)書き損じたハガキは、どのように回収、換金するのか？

A：日本では、書き損じハガキは手数料を払うと新しいハガキや切手に交換することができる。それらを換金する。

Q：青年をサポートする活動は？シンガポールでは組合員証を見せれば、割引があると聞いた。

A：それぞれの地域で独自の活動も行っている。企画も青年が行い、その他の若手を参画させる。国会見学、本社見学、スポーツ、ギネスに挑戦等。

Q：リーダーをどのように育成しているか。

A：郵便局内でリーダーシップのありそうな若手を選び、彼らに任せつつ、バックアップする。ひとつ心がけているのは、組合や会社の歴史等勉強もしてもらう。大変な苦労をした方が人間は伸びる。



Q：ユニオンショップについて説明してほしい。

A：会社と労働組合で、入社したら必ず組合に入らなくてはならないという協約を結ぶ。組合が複数ある場合は、どこか選ばなくてはならない。JPはユニオンショップではない。後からユニオンショップにすることは難しい。組合が1つのうちに、ユニオンショップ協定を締結することをお勧めする。労使間で安定した信頼関係がないと難しい。メリットも多いが、道のりは大変。

報告：UA ゼンセン 瀬戸 哲郎

## 「グループワーク」

セミナーの最後のセッションでは、日蒙参加者を2グループに分けグループワークを実施した。

テーマ

グループ1「組合における女性参加・役員を増やすには？・男女共にワークライフバランスを達成するには？」

グループ2「青年の組織化における課題・組合に関心を持たせるには？」



討議時間 13:15～14:15（討議後、各グループの代表者による発表を実施）

発表内容



## グループ1

- 国政レベルでの取り組み
  - ✓ 政策決定レベルに女性を送り込むなど、政府への働きかけ。
  - ✓ 女性の権利強化のための ILO 条約（100 条、111 条を想定）批准への働きかけ。
- 産別レベルでの取り組み
  - ✓ 女性の労働条件改善に向けたキャンペーンの展開などによる機運の醸成。
  - ✓ ジェンダーやセクシュアルハラスメントに関する知識習得、女性のスキルアップセミナーの実施、女性のリーダーシップ強化についての取り組み。
  - ✓ 男女格差の有無の実態把握に向けた各種調査の実施。
- 単組レベルでの取り組み
  - ✓ 加盟組合レベルでは女性の役員が多く男性役員が非常に少ないため、男性組合員の組合活動への参画促進として男性向けの組合活動を強化する。

## グループ2

- 課題
  - ✓ 青年の労働組合に関する知識の低さ、関心の低さ。
  - ✓ 労働組合の活動・成果の宣伝不足。
  - ✓ 青年の社会運動への参画の低さ。
- 組織拡大に向けての取り組み
  - ✓ レク活動を拡大し部会レベルでの交流の実施。
  - ✓ 経営側と協議をした上で労働組合への理解を深める場の設置。
  - ✓ 新規入社者へのユニオンショップの適用に向けた労使協定の締結。
  - ✓ 国際交流の推進、同世代の相互理解の深耕。
  - ✓ 組織を超えて、同じ興味を持つ者のグルーピングと共同での組合活動。
  - ✓ 労働組合活動に関心を持ってもらうための宣伝活動の強化。
  - ✓ 未組織企業の組織化に向け、労働組合の意義、加入のメリットなどの PR 活動の実施。
- 次世代リーダーの育成
  - ✓ 青年期からのリーダー育成の取り組み開始。
  - ✓ 組合の活動を青年層への拡大。そのために社会貢献活動などの活用。
  - ✓ 今回議論した内容の各産別のユースセミナーでの紹介。
  - ✓ 異なる産別の青年同士が交流できる仕組みの構築・交流の輪の拡大。

## 講評（UNI-LCJ 小川事務局次長）

- 取り組みに向けた熱意を感じ嬉しく思う。この熱が冷めないうちに活動に着手して欲しい。
- UNI の活動やニュースは日々ホームページでアップされている。こちらを参考に取り組みを進めて欲しい。
- UNI-Apro 青年委員会の活動として、リーダーシップ育成セミナーを開催するので、ぜひモンゴルからも参加して欲しい。

## 「閉講挨拶」

### 日本から、新井団長

- 青年、女性の組合活動への参画は日蒙に共通する課題だと思う。特に日本の方が組合離れは深刻だと感じた。
- 日本は低成長期にあり少子高齢化が進展するなど大変厳しい時期にある。モンゴルも現在は高度成長期にあるが、いずれ日本のようになるかもしれない。そのため現在の高度成長期に労働組合として労働条件の改善、賃金の引上げなど積極的に行うべきである。今こそ組合が活躍する時である。そして、組合があったからこそなった、組合がこれを勝ち取った、ということアピールすることも重要だ。
- 女性と青年の活用は喫緊の課題だ。社会を形成するのはこれらの方々であるからだ。
- 今の決意が熱いうちに実行に移して欲しい。1年後の目標を立て、それに向かって動いて欲しい。
- 私たちも「ブレキングスルー」の気持ちを持ち、新しいことにチャレンジしていきたい。
- 今回は日本からの参加者に青年が少なかったため、次回は青年を送り込み交流をさらに活発化させていきたい。

### モンゴルから、オユンバヤール UNI-LCM 議長

- 今回のセミナーは日蒙双方にとって有意義であった。
- 私が UNI-LCM 議長になり2回目のセミナーであったが、次回も実り多いものにしていきたい。
- 貴重な時間を割いて日本より来ていただいたことに感謝している。モンゴル参加者も職場を離れ参加してくれたことに感謝する。
- 青年をテーマにしたグループワークの議論を聞いたが、いいアイデアが多く出た。自分が今まで青年の声を聞いていなかったことが良く分かった。活発に議論してくれた青年の方々に感謝したい。
- 引き続き、青年を中心に積極的な活動を推進していく。今後とも交流を続けていきたい。ぜひよろしく願いしたい。



## 4. 感想

JP 労組 中央執行委員 新井 康寛

成田空港では、横綱白鵬や日馬富士をはじめ、多くの力士の姿があった。本場所が終わってモンゴル出身力士が里帰りする飛行機と同じになったのは偶然とはいえ、少し得した気分のスタートとなった。

私の中でのモンゴルのイメージは、砂漠、草原、そしてモンゴル相撲という漠然としたイメージしかなかった出発前。本来なら一定の下調べをして参加するのだが、参議院選挙のためにまったくの事前準備もせず参加してしまった。

モンゴルの空港からホテルに向かう道すがら、工事中の道路ばかりで渋滞、あちらこちらで見える建設中のビルはマンションだと聞き、イメージが全く違っていた。ウランバートルは「都会」だった。

二日目に行われたセミナーでのカルチャーショックは、モンゴルからの参加者 30 名中のなんと 28 名が女性。また、参加 7 組合の委員長がすべて女性だと聞いて、どんな国・組織なんだろうと興味津々。

セミナーにおいて、女性の社会進出が進んでいる、高学歴化も進んでいると聞いて、女性役員が多い理由も少し納得。ジェンダーの問題などについては日本とほとんど変わらない環境下にあると聞いて少しホッとした。

グループワークは「青年の組織化」に参加。モンゴルは高度成長期にあり、35 歳までの青年層が 3 割強と多いことから青年の社員も多いが、「悩みは組合費を払いたくない、組合員であることのメリットは？」など、組合と一定の距離を置く人が多い一方、イベントやセミナーなどには積極的に参加するなどの報告があった。

青年とは程遠い年齢の私が発言するのもどうかと思いつつも、経験上からのアドバイスをいくつか。組合費は保険ではない。組合費を払って活動に参加するもの。メリット論は日本でもよく聞く言葉であるが、活動に参加する中で見えてくるもの。参加するきっかけは何でもいい。一つのことによって多くの人を集めるのは困難になってきた。一つの果実からブドウの房へ、スポーツやイベント、セミナーや趣味など、いろいろな行事を行い、そこに何らかの形で参加してもらい、それを労働組合が集約する。そういったことを仕掛けてみてはどうか。

また、テレコムと郵便労組(青年のグループは主にその 2 組織だったため)でいいので、まずは青年組織同士の交流を始めてはどうか。良いリーダーを育てることが良い組織を作ること。10 人に 1 人の良いリーダーで組織は動く。まずは若い人でイベントなどを企画、そしてそこに集まった人を組織化する。そのことによって自信につながりリーダーが育っていく。などといったアドバイスをさせていただいた。

グループでの雰囲気は、是非やってみようということとなったことから、私は、「日本には『鉄は熱いうちに打て』ということわざがある、今の熱い思いを忘れずに、できることを着実に実践してほしい」とアドバイスすると、「モンゴルにも『山羊の肉は熱いうちに食べ』ということわざがある。山羊の肉は冷めると固くなるので熱いうちに食べるという意味」と聞かされ、これまた日本と同じと感じた。

私は、今回の派遣団の団長として、どんなセミナーになるのか。多少の不安を持って参加したが、組合活動の原点を想起させ、行く道を見出すことのできる良いセミナーとなったと思っている。モンゴル LCM の各組織が一步でも二歩でも前進してもらえればうれしいし、男性がもっと積極的に参加し、行動を起こすことを願いたい。私たちも女性役員を増やし、女性の目線での活動ができるよう取り組みを進めたい。

最後に、セミナーはもちろん、終了後の課外体験での草原、ゲルでの宿泊、野生の馬、羊の解体、満点の星空、本当に思い出に残るモンゴルでの5日間だった。同行させていただいた UNI - LCJ のメンバーに感謝したい。そして、オコンバヤール議長、ほか多くのモンゴル LCM メンバーに感謝する。





出発前、モンゴルに行ったことのある方から、「空港からウランバートル市内に入るまでの風景でモンゴルに来たなと思うよ」とのお話を伺っていた。しかし、実際に到着してみると道路沿いは開発が進んで多くのビルが林立しており、市内までの道のりは経済発展の威力に驚かされるプロローグとなった。

また、事前には伺っていたものの、やはりモンゴル人女性のパワーには圧倒された。生命力が違う。賃金面でも、男女間での格差はなく、むしろ女性の方が経済的に豊かだとのこと。その背景には、女性に高等教育を受けさせる風習があり、兵役のある男性に比べ学業に集中できること。また、最近まで健康な男性は韓国に出稼ぎに行く傾向があり、国内では女性が就業機会を持ったとの説明も伺った。この出稼ぎについては、健康を害して帰国する人がいること、外国との賃金格差が縮小していることから、昨今では減少しているとのこと。各分野で男性の国内就業者数が増加すれば、セミナー出席者の9割が女性という風景は変わるのか？人的資源も豊かになることで、より経済発展に結びつくのか？今後もその発展から目の話せない国であると思った。

実際にモンゴルを訪れてみると、新しいビルは近代的で、街を歩く女性は都会的だった。鉱山開発の進展に伴い、これからも経済は発展していくのだというエネルギーを街の随所に感じた。また、経済発展に伴い外国からの来訪者も増加しているのであろう、ゲルキャンプでも多くの台湾人や韓国人観光客を見かけた。トーラ通訳の話では、やはり英語次いで中国語の人気の上昇しており、来訪者数でも中国人が増えているとのこと。来訪者数の減少とともに、日本のプレゼンスは下がり気味のようなのである。モンゴル側の参加者からは、親日的な意見を多々伺っただけに、少し歯がゆい気持ちがあった。

セミナーを通じ、モンゴル国のエネルギーを羨ましく思いつつ、日本もそのエネルギーに負けてはいられないと感じた。

最後に、若輩者の自分を多々手助けしてくださった事務局の小川様、新井団長、瀬戸様、川下様、本当にありがとうございました。そして、夏休み期間にも関わらず参加いただいたモンゴル側参加者の皆様方にも心から感謝いたします。





モンゴルが近年高い経済成長を続けていることは、街中を走る乗用車の多さ、慢性的な渋滞、歩行者の年齢の若さ、旧来の老朽化したビルの横で新築マンションの建設が始まるなど随所で感じる。一方で、街中で走る乗用車はほとんどが日本製の中古車であり、スーパーマーケットに並ぶ食品はロシアや中国からの輸入製品が多く自国製品が無い。資源や家畜などの原材料の輸出を中心に産業が発展しており、自国での製造業の育成は今後の取り組み課題であろうと思われる。また、英語を理解する者はホテルなどほんの一部に限られ、飲食サービス業では片言の英語も話せない者も多く今後、さらなる発展に向け、国際化についても早急に進めなくてはならないだろう。小売店は小規模な商店（パパママストア）が多く、スペースも非常に狭い。大手資本による大規模な総合スーパーのような業態が未だ登場していない。流通小売業については今後、大きな転換期を迎える可能性が高いのではないかと。モンゴルについてはそのような感想を持った。

セミナーの中では女性の就業率が高く、男性よりも女性の方が高学歴で優秀である、とする説明がある一方、女性労働者の多くは男性幹部の下で働いているのが現状だという。事実、会場となったモンゴル郵便本社のオフィスを覗くと、多くの若い女性労働者が少数の男性幹部と思われる年長の男性と共に働いている。女性の社会進出は進んでいるが、昇進機会の均等が課題となっていると思われる。それとは逆に組合の中では女性幹部が多く、今回参加した産別ではモンゴル側は全て女性が委員長である。会社と組合とで幹部登用の考え方が全く異なるのは、労使とも経営層、執行部が男性中心になりがちな日本とは大きく事情が異なるようである。

セミナーの中での質疑では、青年の組合活動への参画手法が議論となっていた。労働組合の主催するレク活動（自己啓発活動）や社会貢献活動に参加した青年層の組合員を、その後の労働組合活動にいかに参加させるかは日蒙双方（ひょっとしたら全世界共通）の課題である。これは完全に私見だが解決策は2つしかないのではないと思う。一つは組合が身近になること、もう一つは危機意識を高めることである。身近になる手法の一つとしてレク活動（自己啓発活動）や社会貢献活動があるが、そこから先に実際の労働組合の活動が何をしているのかさっぱり分からない（あるいはたいした活動をしていない）ことが問題だ。自分たちの身近な労働条件や職場環境が労働組合の取り組みにより変わった、ということを実感できれば支持・共感が増すはずである。組合役員と直接会って話ができる、話に対してそれがどのようになったかフィードバックをきちんとする、このような地道な取り組みが必要だと考える。危機意識を高めるのは、仮に労働組合が無ければどうなっていたか、青年達に考えさせることである。これはあってもなくても同じ労働組合では成立しないロジックであるが、最低限の法でしか守られていない労働者がいかに不安定であるかを、きちんと話すことも必要だ。そのような取り組みを確認し、1年間活動し、次年度のセミナーでそれを検証し改善する、そのようなサイクルを作ってみてはどうだろうか？事例紹介で「へ～すごいね」で終わらせるのではなく、検証結果を発表し議論するのである。

最後に、今回のセミナーを無事に終えたことに対し、ものすごい熱意と気遣いを見せていただいたオユンバヤール UNI-LCM 議長をはじめとするモンゴル側メンバー、準備万全で乗り込んできた日本側メンバー、あちこち奔走してご調整いただいた小川 UNI-LCJ 事務局次長、以上全員に心から感謝し、お礼を申し上げたい。

4時間半といえば、国内出張でもありそうな移動時間だが、成田からウランバートルに向かう4時間半を経れば、眼下には別世界が広がる。なだらかな起伏のある見渡す限りの緑の絨毯の間を、時折縫い目のように河や轍が走っている。偶然隣に座ったモンゴル出身力士は、窓の外を覗きながら「懐かしいね。久しぶりの故郷だ」と目を細めていた。一年ぶりの里帰りだそうだ。出発日の7月22日は、我々からすれば民主党が大敗した衆議院選挙の翌日だが、力士からすれば、本場所千秋楽の翌日である。

セミナーでは、若手の組織化と男女平等に関するテーマで議論が深まった。モンゴルでは人口の36%が16 - 35歳の若者であり、モンゴル労働組合連合では40%、モンゴル通信労組では80%にあたる。その若手の組織化を推進するために、旅行、スポーツ大会、芸術大会や各種研修等工夫を凝らしている。また、シニアとユースの交流も検討している。一方、男女平等については「組合活動にいかにも男性参加者を増やすか」が主題となっていた。議論をしているのは全員女性。「組合活動への女性参加率を如何に増やすか」を男性ばかりで議論している日本の労働組合とは真逆である。何とも羨ましい構図だが、議論の熱さからすると、同様に悩みは深いのだろう。モンゴルでは女性が外で働き、家計を支えることが珍しくない。国家公務員では6割が女性であり、個人経営者も女性が多いという。今回のセミナーに出席している女性は、家事・育児と仕事の両立に加え、組合役員（中には委員長も！）をこなしている。日本とは仕事や組合活動のあり方が根本的に違うのかもしれないが、そのエネルギーがどこから来るのかは想像すら及ばず、モンゴルの社会や彼女たちの生活スタイルを更に知りたいと思った。

セミナー後の生活体験では、モンゴル側の参加者とともに草原のゲルキャンプに行った。ここでは空と大地が平面として広がり、その間の空間に生かされていることを実感する。夕食のメインディッシュは、近くの遊牧民から調達してきた羊を、彼女たちが解体・調理して用意した。おしゃべりをしながら手際よく捌いていく様子は、昔の日本のお正月準備のようでもあったが、扱うものが羊一頭という点は、農耕民族と遊牧民族の決定的な違いである。その様子を我々は遠巻きに見せていただいた。普段はウランバートル近郊で暮らす彼女たちにとっても、草原で遊牧民の暮らしをすることは楽しいという。この大草原、遊牧民の暮らしを残してほしいと願うのは、外国人観光客のエゴというだけではなさそうである。

小職のプレゼンでも触れたが、日本とモンゴルの間で低炭素発展パートナーシップを推進している。日本の技術を提供することで、モンゴル国内における温室効果ガス排出削減に貢献する制度である。モンゴルの持続的な成長のために、我が国が得意とする環境技術が貢献できるのは喜ばしく思うし、実際モンゴルの発展ぶりは、行く度に実感する。経済が発展する局面こそ、その恩恵を国民生活の向上に結び付けるために、労働組合の役割が重要となる。モンゴルの労働組合の力の見せ所である。

最後に、初顔合せとは思えない程チームワークを発揮し楽しい道中を過ごした日本メンバー、日本の政治・行政に明るく、様々な付加情報を与えて下さった通訳のナラン、トーラ夫妻、家族・友人のような親近感で受け入れて下さったモンゴルのメンバー、実りの多いセミナーを企画して下さった事務局の小川さんに感謝を込めて、Баярлалаа！

前日の選挙結果に暗い気持ちを抱えながら空港ゲートで待っていたら、浴衣姿のモンゴル力士が…。相撲は詳しくない私ですら、一際目立つピンクの浴衣が白鵬であることに気付く。ビジネスクラスには他にも有名な力士がたくさん居たとのこと。エコノミーも里帰りする力士とその家族らしき人々で賑やかだった。



夕方ウランバートルに到着。いつものように、通訳ナラン氏が組合の人の車で出迎えてくれた。前回来た時より更に多くの建設中の建物が、空港を出てすぐ目に入って来た。新しい空港も建設予定、地方へ伸びる幹線道路も整備されているという。渋滞解消対策のため、日によってナンバーで市内新入制限をしているとのこと。そのため、遊牧民生活体験のため郊外に出かける時も、女性役員所有の車が動員されたのだが、一部の車のナンバーがその日ホテルまでアクセスできず、途中で乗り換えることになった。車で市内に通勤する人も、週に何日かはバスかその他の手段を利用せねばならないとのこと。それでも渋滞が緩和されたようには思えなかった。数年前まではベジタリアンの私には苦しかった肉食中心の食生活も、今や中国野菜が市場に出回り（富裕層は安全な国産野菜を採るとのことだが、生産される季節は限られている）料理とレストランの選択肢が格段に増えた。

前回 2011 年はオイドフ氏退任後、初のセミナー。2012 年は日本に受け入れ。今回はオюнбаяール議長の下、2 回目ということで、前回ほどの不安はなかったものの、女性役員間の人間関係に起因するような問題を相変わらず聞かされていた。女性役員が多すぎてもうまくいかなことがあつた。適度に男性がいた方が、女性の間の感情的な対立を和らげるかもしれない。また年齢層に偏りがあつても、例えば若い人がいなければ組織は存続していかない。組織が進化していくには、フレッシュで大胆な若い世代も必要だし、経験に裏打ちされた冷静な判断ができる世代も重要だ。バランスが大事だとあらためて思う。

モンゴルの組合は、言葉の制約もあり、なかなか UNI / UNI Apro の活動に積極的に参加できていなかった。国際労働運動に触れるのも、年に 1 回の UNI-LCJ との交流が中心となっているだけに、オюнбаяール議長はじめ UNI-LCM の期待は大きい。しかし、毎回訪問する度に、短時間で大きな変化を目の当たりにする。モンゴルの労働組合も、もっと国際労働運動に参画してほしいし、UNI Apro でもユースや女性の研修機会は様々あるので利用してほしいと呼びかけた。

今回は事務局を含めて 5 人という少数精鋭代表団だったが、男女・年齢構成は理想的だったし、日本人講師のご協力と寛大さおかげで、無事終えることができた。オюнбаяール議長はじめ UNI-LCM 各構成組織の役員には、夏休み期間中ではあつたが、セミナーだけでなく、野外交流時にも大変お世話になった。通訳のナラン、トーラ夫妻には、モンゴルの歴史から最新事情を教えてもらったり、野生馬の保護区に連れて行ってもらったり、長年セミナーを全面的に支えていただいている。厳しい選挙でセミナー直前まで多忙を極めたにもかかわらず、充実した内容の発表資料を作成して下さった講師各位に、また、グループをまとめ率いて下さった新井団長に、心から感謝申し上げる。